

みなみいなごえいせき
1. 南稲越遺跡

所在地：あわら市伊井

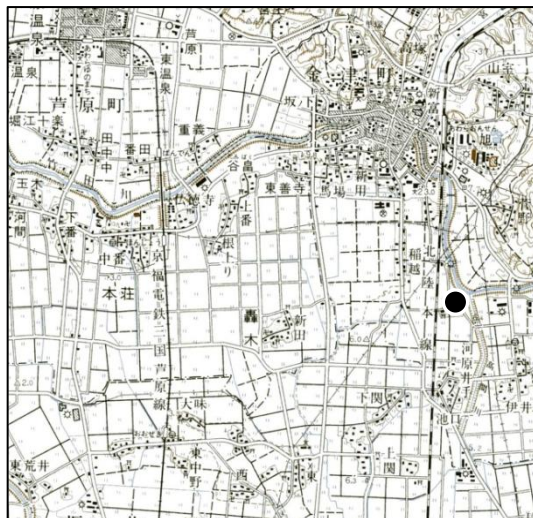
調査原因：北陸新幹線建設事業

調査期間：平成 28 年 7 月 25 日～12 月 9 日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：4,150 m²

時期：弥生中期～古墳時代前期、古代、中世



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 南稲越遺跡は、あわら市(旧金津町)の南部、高間川と竹田川が合流する地点にあります。遺跡周辺には広大な水田が広がり、遺跡は水田面よりやや高い自然堤防上に広がっています。

本遺跡は、過去にあわら市教育委員会により調査が実施された経緯があり、主に弥生時代後期から古墳時代前期(約 1,800 年～1,700 年前)、奈良・平安時代(1,300 年～1,100 年前)の集落が確認されています。また、高間川を挟んで東側に広がる伊井遺跡は、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての玉作り(管玉・勾玉の製作)の集落として知られており、竹田川に沿って広く遺跡が展開していると言えます。

遺構 今回の調査は、昨年度に引き続き北陸新幹線建設事業に伴って実施したものです。主要な遺構は、竪穴建物 2 棟、掘立柱建物 11 棟のほか、井戸 4 基、土坑 33 基、河川です(写真 1～5、第 1 図)。

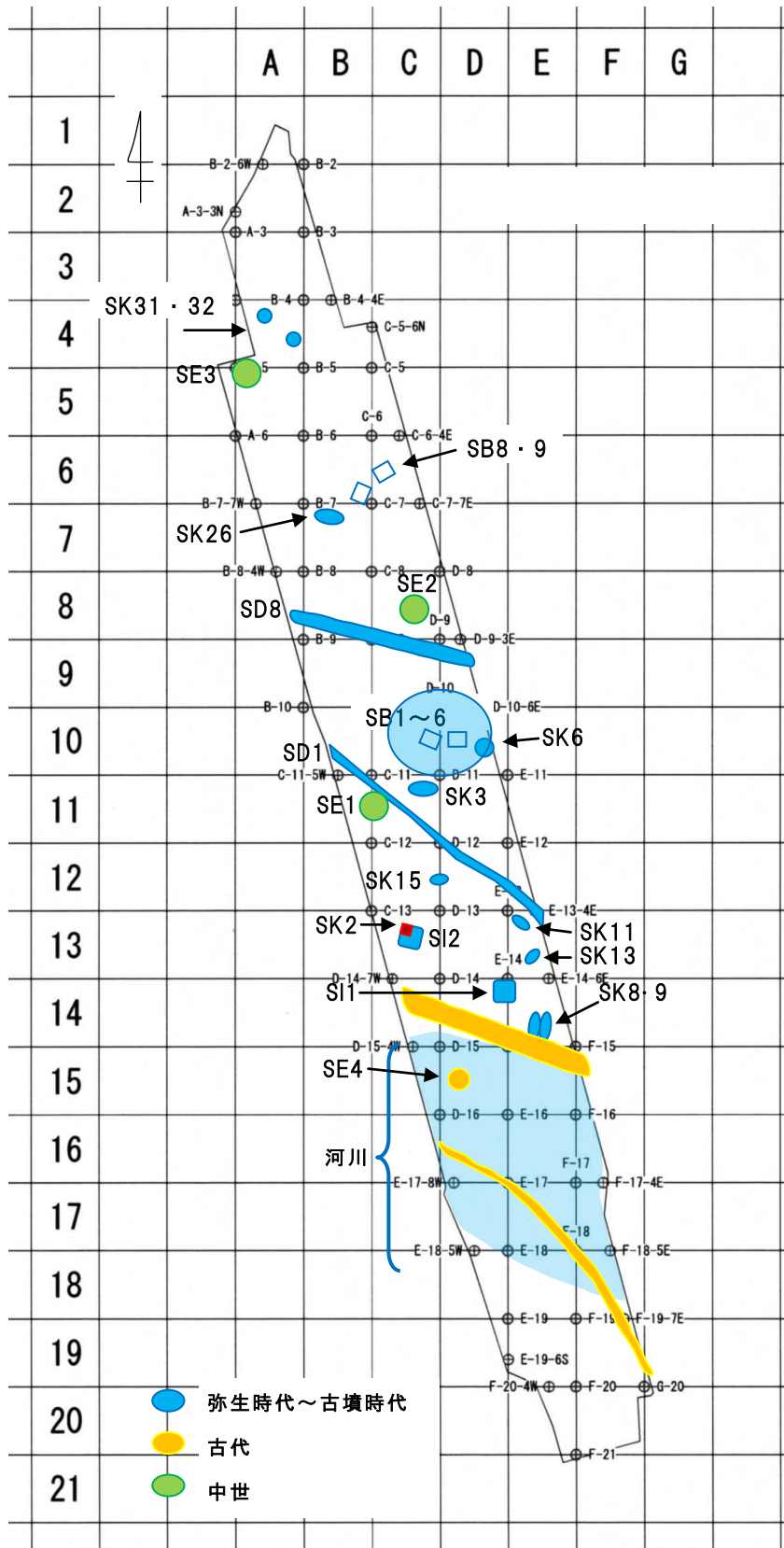
【弥生時代中期～古墳時代前期の遺構】

竪穴建物 SI1 は、四隅が丸い長方形をしており、中央に柱を立てるための穴が並んでいました。竪穴建物 SI2 は、北西の隅から焼土を伴う穴(SK2)を検出し、両者の時期は出土土器から、古墳時代前期初頭と考えます。

掘立柱建物は 11 棟確認しましたが、うち 7 棟が調査区の中央部に集中します。掘立柱建物 SB1～6 は建物の向きから大きく 2 つのグループに分かれ、建てる際に計画性があったと考えますが、小規模であることから長く使用することを想定した建物ではなかった可能性があります(写真 1)。

土坑(大型の穴)は、墓と判断できるもの(SK3・4・8～11・13・14)や内部に多くの土器を廃棄したもの(SK6・15・26)があります(写真 2～5)。土器は、地元の特徴を有するものと、近畿、東海、山陰地方の特徴を有する土器と一緒に出土し、他地域との交流を示す良好な資料を得ています。

溝は、溝 SD1・8 が幅約 1.6m、深さ約 1.1m の規模で平行するように掘られており、掘立柱建物や大型の穴(土坑)を区画していたと考えます。また、調査区南部には幅約 26m の河川があり、弥生時代後期の土器とともに、石杵いしぎねが出土しています(写真 6)。



第 1 図 調査区全体図 (1/1,000)

【古代～中世の遺構】

井戸は、井戸 SE1・3・4 が素掘りの井戸であり、井戸 SE2 は板材で組んだ井戸枠が残り、土師質皿、白磁、珠洲焼、曲物が出土しました。井戸 SE4 は、底面が円形にくぼみ、内黒土器の椀が出土し、平安時代の遺構と考えます。

遺物 遺物は、テンバコ 110 箱分が出土し、多くが弥生時代後期から古墳時代前期の土器で占められます。石器・石製品は少なく、伊井遺跡のように玉作りを行っていたと言える遺物は希薄です。注目すべき遺物としては、石杵と鏡形土製品があります（写真6）。石杵には、赤色顔料が付着しており、顔料を細かく砕くために使われたと考えます。

まとめ 本遺跡は弥生時代中期から古墳時代前期を主体とした集落・墓域であったことが分かり、伊井遺跡と一連の遺跡であることが明らかになりました。（三原翔吾）



写真1 掘立柱建物 SB1～6(北西から)



写真2 土坑 SK3(南西から)



写真3 土坑 SK6(南から)



写真4 土坑 SK8・9(南から)



写真5 土坑 SK26(南から)



写真6 河川出土石杵(南から)